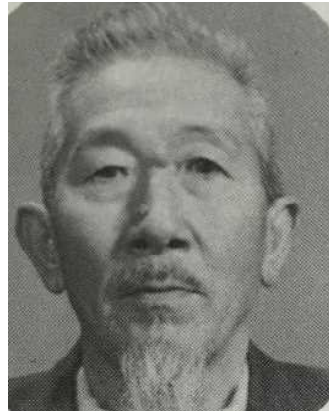


アンモナイトの発掘に人生をかけた追究者

村 本 辰 雄

化石は、大昔のできごとや、時代の移り変わりを詳しく教えてくれる自然からの贈り物です。私たちは、化石を見つめることを通して、郷土のかつての姿に思



〔村本喜久雄蔵〕

いをはせ、郷土の自然を大切にしようという気持ちをもつことができず。さらに、草木がうっそうと生い茂る山間で、冷たい雪解け水にぬれながら、地層を詳しく調べたり、化石を探したりした人のロマンを感じることもできるのです。

村本辰雄は、若いころから六十年もの長い間、三笠市桂沢の地層や化石について調べ、様々な種類のアンモナイトや、珍しい化石を発見しました。そのため、町の人たちからは「アンモナイトおじいさん」と呼ばれていました。

辰雄が初めて桂沢に化石の調査に来たのは、一九二七年の夏でした。当時の桂沢は、どこを見ても大きな木が生い茂り、昼間でも暗い原始林には、熊をはじめとするたくさんの野生

動物が生息していました。

当時は、化石に興味をもつ人が少なかったせいも、化石を求めて桂沢にやって来る人はほとんどいませんでした。辰雄は、石ころに混じっている大小様々な化石を夢中で拾い集め、リュックサックはたちまち化石でいっぱいになってしまいました。その時、特に辰雄の興味を引いたのは、今までにない大きな形をしたアンモナイトでした。辰雄は、なんとかそれを持ち帰ろうとしましたが、一人の力ではどうすることもできず、後日取りに来ることにして山を下りました。

桂沢から帰ってきた辰雄は、数日後、幾春別川から分かれていた奔別川一帯の地層と化石を調べました。川の上流には選炭場があり、そこから少し登ったところの地層を調べていた辰雄は、二枚貝の化石と一緒に、面白い巻き方をしたアンモナイトを見つけました。それは、ヘビがとぐろを巻き、少しほぐれたような変わった形をしていました。

「これは、今までにない新しい種類のアンモナイトに違いがない。」

そう思った辰雄は、それを大事に持ち帰り、何年間も研究しました。

一九五五年の夏、アンモナイトの研究で有名な九州大学の

松本達郎^{まつもとたつろう}が、地層や化石を調査するため三笠にやって来ました。松本は、町の人たちから「アンモナイトおじいさん」の話を聞き、辰雄の家を訪ねました。家に大切に保存されているたくさんの化石を見てみると、ふと、珍しい化石が松本の目に止まりました。それは、辰雄が奔別川で見つけたヘビがとぐろを巻いたような化石でした。それを見るなり松本は、「これは世界的にも初めて見る新しい種類のアンモナイトだ！」

と喜びました。研究の結果、学名を「ニッポニテス バッカス マツモト アンド ムラモト」と名付け、その化石を世界中のアンモナイト研究者に紹介しました。「ニッポニテス」は日本の石、「バッカス」は、ギリシャ神話に出てくる酒の神様という意味です。つまり、「日本の酒の神様は、酒の大好きなムラモトのおじいさんですよ。」というユーモアを盛り込んだ^こ学名で、辰雄の努力を称^たえたものでした。

一九五一年、北海道の開発に必要な桂沢ダムの



〔ニッポニテス バッカス マツモト
アンド ムラモト〕

(資料協力：三笠市教育研究所)

建設が始まりました。ダムが出来上がり、化石が眠^{ねむ}っている土地が、水の底に埋もれてしまう日が近づくにつれ、辰雄は、雨の日も風の日も休むことなく、毎日、桂沢に通い続けました。

「大事な化石を、水の底に眠らせておくのはもったいない。」アンモナイトの化石を生^{しょうがい}涯の友とし、アンモナイトが語る遠い昔のロマンを、いつまでも追い続けたいと願う辰雄には、今、水の底に眠ろうとするアンモナイトが愛^{いと}おしくてならなかったのです。

ある日のことでした。辰雄が、ダムに近い地層からひとつの^{*}ノジュールを掘^ほり出しました。いつもどおり、かたい石に願いを込め、ハンマーを打ち込んでみると、今までに見たことのない変わった形のアンモナイトが出てきたのです。

「これも、新しい種類のアンモナイトに違いない。」

そう思った辰雄は、もうひとつ、同じ化石が入っているノジュールを見つけ出せば、この化石が新しい種類のアンモナイトだということが分かると考えました。

それから、辰雄は毎日、同じノジュールを求めて歩き続けましたが、なかなか見つかるものではありません。探し疲^{つか}れた足には血豆ができ、目がかすんで、辺りがボーンとかすん

で見えるほどでした。

そんなある日、辰雄の目の前に、一台のブルドーザーが、力強いうなりをあげて現れ、ダム工事で掘り出された岩石や土砂を崩し始めたのです。

「崩された土砂の中に、ノジュールがあるかもしれない。」

辰雄は、これまでの疲れも忘れ、ただ夢中で土砂を掘り分けました。あまりの熱心さに心を打たれたのでしよう。ブルドーザーの運転手も、そこで働く人たちも、一緒になって探してくれました。

「あつたぞ！この前と同じノジュールがあつたぞ！」

辰雄は、ブルドーザーが崩した土砂の中から、ついにあのノジュールを見つけたのです。集まってきたみんなの前でハンマーを打ち込んだ後、小刻みに震える指先に力を込め、ノジュールを割りました。

「ありました。ありました。わたしの探していたアンモナイトが…。」

辰雄は、感激に胸を震わせ、ただ、深々と頭を下げるばかりでした。たった一個のノジュールを探すのに、六ヶ月もかかったのです。今、その苦労がようやく実を結び、自然が恵んでくれたこの新しい化石には「ムラモトセラス エゾエン

セ マツモト」という学名が与えられ、大切に保存されています。

ある日、辰雄は、桂沢ダムの奥にある幾春別川の地層から、小さなアンモナイトと一緒に、骨の化石が入っているノジュールを見つけました。この骨は、中が空洞になっていたので、すぐに海に生息するハ虫類の骨ではないことは分かりました。しかし、どのような生物なのか分からなかったので、国立科学博物館の長谷川善和に見てもらいました。長谷川は、辰雄が見つけた骨の化石を見て驚きました。この骨は、空飛ぶハ虫類と呼ばれ、白亜紀時代の空を飛んでいた「プテラノドン」の肢骨(腕の骨)だったのです。「プテラ

ノドン」の肢骨は、日本で初めて見つかった重要な化石となりました。

三笠市が海だった八千五百年前、海の上を、七メートル弱もある大きな翼を広げ、ゆうゆうと飛んでいたハ虫類がいたこと



〔「プテラノドン」の肢骨〕
(資料協力：三笠市立博物館)

を、この化石は、私たちに教えてくれたのです。

その後も辰雄は、化石に興味をもつ仲間とともに多くの地層を調べ、化石を掘り続けました。

晩年、辰雄は三笠市の子どもたちに語りかけます。

「化石は、見世物として騒いでいるだけじゃだめなんです。

化石は、大昔に生物が生きた歴史を伝える証であり、自然が与えてくれた素晴らしい贈り物なのです。ですから、この化石を通して、もっと自然に親しみ、自然の不思議な力に目を向け、自然を大切に守っていくことが何より大切です。」

郷土の自然と化石を愛し続けた辰雄の想いは、市民に脈々と受け継がれ、三笠市は二〇一三年に日本ジオパーク委員会の厳しい審査を通過し、「アンモナイト等の化石や石炭、断層変異地形など北海道の大地の生い立ちを体感できる地域」として認定され、ジオパークの一員になりました。辰雄が発掘した様々な化石は、今も、見る人々を太古の世界に誘う輝きを放ち続けています。

一九〇四	福島県平市（現在のいわき市）で生まれる
一九二九	三笠市住友石炭鉱業奔別鉱山の見習職員となる（三十五歳）
一九三一	家業を継ぐため福島県に戻り、剣ヶ峰鉱山主任技師になる（三十七歳）
一九四六	北海道へ移住し住友弥生鉱山坑内員になる（四十二歳）
一九五五	松本達郎（九州大学教授）と化石採集を開始する（五十二歳）
一九六七	「村本化石標本室」を開設する（六十三歳）
一九八八	八月十四日に亡くなる（八十四歳）

* 選炭場：採掘した石炭を選別する工場

* ノジュール：化石を含んだ球形の岩石